

真実功德の名号

——入出二門の源泉——

安 田 理 深

「世親菩薩、大乘修多羅真実功德に依って、一心に尽十方不可思議光如来に帰命したまえり。無碍の光明は大慈悲なり、この光明すなわち諸仏の智なり」。その後の二行は注釈です。初めの二行が、これがこの前申しましたように一心帰命ということなのですが、ただ一心帰命という訳にはいかないのです。どこで一心帰命を立てるかということですね。これがないと、一心帰命が立ってみようがない。直接に立てようと思ったら、自分の心に立てんならん。自分の心っていうのは動きどうしに動いているもんでしょ。そこに一心というものが立つはずがないでしょ。一応立ったただけですぐ、パッと空クジを引く。だからそこにですね「依」という字が非常に大事なんですよ。『浄土論』というものはですね、その浄土の個人、個人の意義という、天親菩薩個人の生活の意図というのが無論ある。と同時にですね、やっぱりその歴史の意義というものをもつとる。だから『浄土論』だけ取り出してですね、『浄土論』というのはこういうもんだと言ってもそりゃ、個人的意義は明らかになるんですけれども、歴史的意義は明らかにならない。そこを区別しなくてはならない。

歴史といえ、一番まあ、『大無量寿経』の歴史というものから、生まれてきておるわけですね。で、歴史から生まれてきておると言いますが、歴史を創つとる。『浄土論』というものがそれがまた新しい歴史を創つとる。まあそ

いうことをいえば七高僧の全部がそういう具合になるのですけど。特に今、考えてみますとですね、『大無量寿経』といえますけれどもやっぱり大事な点はですね、本願の文というよりはですね、本願成就の文に立って本願を明らかにする。これが真実の教という意味ですよね。長い間この『大無量寿経』が真実の教だということは見えななだ。ご開山までは。たとえ法然上人であってもですね、本願成就の文というものに教えを見出すということにはななかつた。やはり教えとなると『観無量寿経』というものでしたですね。選択本願念仏、本願というものは『無量寿経』に説いてあるわけで、第十八の願です。そりゃまあそうですね、本願の意義というものはですね、『観無量寿経』の教学によって明らかになった。それはその、皆さん読んでみられると、すぐわかりますけどですね、厳密なものですわね。『観無量寿経』の義疏といわれておるものですね、およそ註釈書というものの傑作でしょうね。広くいえば『浄土論』『十地経論』みたいなものに、匹敵するもんだろうと思いますね。『観無量寿経』の積論というのはですね。つまり、りそりうふうにいろいろな科文があるのですわね。『観無量寿経』の科文というものがね。科文というのはつまり、品書きなんです。科文というと、何か案内書みたいなんです、簡単に考えてすわね、『観無量寿経』はどういう文章の組織からできておるかっていうのは、文章の組織っていうのは案内書、イントロダクションみたいなもので、軽く考えていいかという、そうじゃないんですわね、研究の結果なんです。だからして読む人によって皆科文が違ふ。これは大事なことですわね。誰が読んで、同じにはならん。それだからして、その点でわざわざ親鸞はすわね、「善導独明仏正意」とこういったんです。一人、明らかにされた。『観無量寿経』の註釈を書いた人はいるんですが、どうも、『観無量寿経』を説かれた如来の精神というものがはつきりしとらん。こういうことですね。なんか『法華経』とか『華嚴経』とか、そんなような立場で『観経』を読んでいる。やっぱりこれは、『大無量寿経』の本願に照らして『観無量寿経』というものを見ることができななかつた。『観無量寿経疏』というものは、なかなか厳密な、忠実なもので、経文にないところまで科文を立てたんですよ。そういうことがありますね。経文にはないんだから、ある

べきなんだとこういうんですね。ない所に科文を書いた。

一番最後の所に一番大事な科文があります。「汝好くこの語を持って」という、つまり付属の文ですね、「汝好くこの語を持って。この語を持ってというは、すなわちこれ無量寿仏の名を持ってとなり。」と。こういう具合にですね『観無量寿経』に言われるのです。流通するんですから。これはまあずっとこれまで説いてきていることは、念仏を説いてはいませんのでからね。定散二善を説いてきた。しかるにそれを結ぶところになると、定散二善を持ってとこういってない。仏の名を持って、こういうのですね。こういう事も立てて、善導大師はここに、上よりこのかたやね、定散両門という定散二門の益を説くといえども、利益を説いたけれどもですね、説いたのは説いたけど、「意」ではない。説いたのは定散二門を説いたが、説いた意は何かと。こういう時、独断で私はこう思うってなことといったところで、当てになるのですかね。私はこう解釈する。そうじゃないでしょう。上來定散両門の益を説かれたけれども、意は、それは阿弥陀仏の本願に臨んでみればというんですね。阿弥陀仏の本願に臨んでみれば、仏の名を持つということになるんだとこういうんです。そういう『観無量寿経』のいろんなことがあるんですよ。特に五念門とか三心とかですね、至誠心、深心、回向発願心。また五念門の行。行と信というのは一番かなめなんです。これは教学の内容です。行信ということを明らかにするんだからですね。どうでもいいようなことを、色々述べてですね、味わいとかそんなこと言っとらんです。一番かなめのところを押さえなきゃいかんですね。聞く者は、やっぱり問題もつとる。聞こうと行って頭で聞きに行ったところで聞けるもんじゃありません。何か問題をもつとるとそこへ響いてくる。問題を持つたんとおつたら聞きのがしてしまふ。絶えず問題もつとると、そこへ響いてくる。

それで今大事なことはですね、三心てなことが非常に大事なことで、だから親鸞も『大無量寿経』のやっぱり三心ということを知りました。『教行信証』では至心・信樂・信心と三心とを解釈した。あれは読んでみたところで全々三心に見えはしませんわね。至心に信樂して我が国に生まれんと欲え、とこうある。流れるような言葉ですわね。流

それから二河譬でもそうでしょう。善導大師が本願にふれた記録なんでしょう。譬喩といって昔話をしたことじゃなしにですね。善導大師が本願にふれたそういう記録ですね。そういうものがある。あそこにやっぱりですね「汝一心に正念にして直ちに來れ、我よく汝を護らん」と。あそこに我とでてますね。我・汝とでてます。やっぱり自分みずからにね、受けて出た言葉ですわね。こういうように先月みましたように『願生偈』っていうものはつまり本願成就の文をうけるとともに、そこに未來を生み出しておる。それに照らしてみても初めて意義が明らかになる。こういうことですね。ことに「汝一心に正念にして直ちに來れ、我よく汝を護らん」というようなことはですね、これはつまり善導大師が本願招喚の勅命を聞いたのですから。つまり欲生我國ですね。「至心信樂欲生我國」ってことを善導大師が体解された言葉やわね。

それですね、この間言ったのは本願成就の文から見るとですね、やっぱり眞実功德相ということがですね、大事になってくる。こんな言葉も普段はですね、なんとも思わん。あるかなあと思ってたです。ここへ来て色々話をしなくてはならないからですね、そういう事を考えとった。始めからわかっとたんじゃない。『浄土論』自身からいえば眞実功德相というのは、二十九種莊嚴功德ということですね。広げれば二十九相。天親菩薩自身は二十九種莊嚴功德のことを、第一義諦妙境界相という言葉で言っておられます。第一義諦妙境界相の第一義諦っていう意味がつまり如來っていうような意味でしょうね。第一義諦というのはつまりその形がない。第一義諦というのは法性眞如というような意味です。ここに第一義諦妙境界相、相といいます。これになるとやはり龍樹の教学と違って天親菩薩の教学となつて、唯識の教学というものが背後にあるんですから非常に用語が嚴密なんです。普通我々が読む時には妙境界相という字があつても、ないのと同じように読む。第一義諦妙境界だと。そうじゃないんだ。第一義諦妙境界は無相なんだ。無相の相なんだ。じゃあ誰がそこに相を与えたかという、願生心が与えたんだ。如來選択の願心というものがその形を与えたんだ。形なきものに形を与えている。こういう意味なんです。願心自身が願心を莊嚴

したんだ。そこに形がでてくる。法性とか無相とかいつているものがどこかにあるわけじゃない。願生心自身が相を与えておる。つまり、そういうものがむこうの方のどこかにあるというんじゃないんですね、願生心というものが自己を完成しておるんだ。『浄土論』ではですね、第一義諦妙境界相というものがあるけど、やっぱり『入出二門偈』でもですね、真実功德相とってあるんですね。これは偈文の關係上、その相という字は入らんですけども。やはりね、それは始めから相というんじゃない。無相の相。それでその真実功德というものが本願というものによって成就された。本願成就だと。本願によって成就されたということである。本當を言ったらですね、浄土は、浄土っていうことを表すと浄土っていうんじゃない、本當を言ったら。無相の願心というものを明らかにしようと。無相の願心というのは叫びなんだ。それを明らかにしようと。浄土というのに意義があるんじゃないんであってですね、願生心自身を明瞭にしようと。こういうことでしょう、本當言ったら。名号もそうでしょう。本願成就の名号という。我々のためにみずから五念門の行を行じてですね、こういうことは『大無量寿経』の勝行段に説かれます。四十八願を起こして、その次の経文ですね、これは非常に大事なんです。詳しくは言いませんけれども、そこに「大莊嚴をもつて衆行を具足する。もろもろの衆生をして功德成就せしめたまう」と、こういう言葉がありますね。「大莊嚴をもつて衆行を具足す」。つまりこれは、不可思議兆載永劫ということの意味ですね。これは『大無量寿経』の経文だけど、やっぱり経文を読む時は『浄土論』を通して読む。『浄土論』を読む時には経文に照らして読む。こういうようなものです。そういうような操作を行なえるということは何であるかという、言葉に対する尊敬ですね。一番大事な事やね。言葉が侮蔑するってことは一番悪です。言葉っていうものを尊敬するってことはそれが人生を尊敬するということ。自分が生きとるといことをね。大莊嚴っていうようなことは、仏教の經典一般から言えばですね、莊嚴っていうのは飾りという意味で使う。菩提心をもって身を飾ると。鎧とか兜とかそういうものです。そしてその衆行というのは六波羅蜜でしょう。菩提心を起こして、そして六波羅蜜の行を具足して、そして衆生をして功德成就せ

しめたもう。『大無量寿経』がでてきた時にはそんなもんでしよう。『浄土論』がないんだから。だけどね、後からでてきた『浄土論』に照らしてみるというと、衆行というのは五念門ですね。五念門の行を具足する。法蔵菩薩みずから五念門の行を行じてですね、そしてその行の功德はですね、行によって勝ちとった功德は、衆生の上に回向する。行はみずから行じて、行の徳は衆生の上に満足せしめる。こういうんですね。このことがやっぱりその回向という言葉を使わずに回向が語られているわけです。

これはやっぱり親鸞の『教行信証』を通して見ると、非常に切切たるものです。この一段の経文は勝行段、勝れた行、勝行段の経文と書いてますが、「乃至一念一刹那も」というような意味があるんですね。我々はぼんやりと寝て、忘れとつても、如来の方は一念一刹も眠ることがない。こういうような意味でですね、如来の方はというて、そんなのは考えてもわからんけども、宗教心はですね、願往生心は眠ることがない。時来たらば、打てば響くように噴出したいと思つとるんです。待つとるんです。衆生が気が付くのをね。だからこういうところから言ってみれば真実功德相というのはね、本願成就というような意味を持つとるんです。本願によって成就された。そしたらその成就したということ、本願によって救ったという意味じゃないのであって、本願によって象徴したのだという意味ですわね。打てば響くと、こういうことです。響いてきた。別に響きを作ったわけではない。だからしてこういうようなこの第一義諦妙境界相というものがちゃんと用意されてあるんですけどもですね、それが何も衆生の方には分からんからですね、ただ不平不満というものを抱いて一生を終ってしまう。真実功德相というものが、何か向こうの方に名号があったそれが真実功德だと言っておるんじゃない。そんなら響かんわね。名号というところに、もう我々が成就、我々が満足した姿があるんだ。本願が我々となって本願を成就された姿が、これが南無阿弥陀仏。

それはどこかにあると考えるというとなつてそればかり題目みたになっちゃいますね。仏身崇拜っていうのはね、いってみれば物質を宗教化するということになる。題目というのは、唱えても分からんけれどもあ

そこに非常な功德があるんだといって唱えればですね、それは一つの仏身崇拜、まじないみたいなもんですね。念仏もへたをするとそういう風になっとるかも知れん。呪文のようにね。南無阿弥陀仏という言葉は何か呪文を唱えるように言うんだと。何かそれ自身が神秘的な力を持っていて奇跡が行ってくるように思う。やっぱり「転悪成徳の正智」といってですね、この功德の内容はですね、先の勝行段の言葉にですね、不可思議の兆載永劫において、菩薩の無量の徳行を積植してやね、「欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず。欲想・瞋想・害想を起さず。色・声・香・味・触・法に着せず、忍力成就して衆苦を計らず。」と、こういうような言葉が出ていますわね。なんかこれから考えてみると法蔵菩薩が揚々としてですね。楽しんで修行したというもんじゃない。欲覚・瞋覚・害覚だけで示している。欲覚・瞋覚・害覚というのは、これは煩惱を代表した言葉ですね。煩惱を、身も心も。欲想・瞋想・害想ね。そういうものが実は功德の内容なんです。我々のありとあらゆる煩惱悪業が、それが功德の体なんだ。その功德と別にそんな煩惱悪業と別に、功德があるといってみたところで、何の事ですかというふうなものだ。何が有難いか、有難すぎて何ともない。だからその身に響かんでしょ。僕はね、そこへ何か考え方というものを思います。何か名号が出来たってそれを信ずるのだと。何か眞実功德の名号があってそれを信ずる。こういう意味もある。しかし、その名号があってその信ずる時に眞実功德が円満するんだ。信ずる時やね。信ずる時を待ってやね、それで眞実功德が我々の、全身全霊を満たす。こういう意味ですわね。だからして信ずる以前にですね、聞其名号信心歡喜以前にやね、眞実功德があるというわけでもないわね。信ずる時に、すなわち至心に回向したまえりというわけで、信ずる時に回向にあずかる。けろりとしている時に回向にあずかる、そういうわけじゃない。信ずる時に回向にあずかる。こういうもんでしょ。だけど、それでは名号というものは後かというのと、後というわけにはいかんじゃないかと。我が信ずる以前に、信ずるに先立って名号がそこに与えられておる。それでここに世親菩薩は大乗修多羅眞実功德相によって一心帰命されておると。一心帰命というものは、その眞実功德の名号によって一心帰命であるというんですから、一心帰命に先だ

ってあるわね。先だってある名号だけど、真実功德というのを得るのは一心帰命の時である。ちょっとなんか矛盾するようでしょう。そうでないかね。こんな矛盾があるんやないやろか。だからまあ真実功德は後やと。信の一念にあるんだから、それまではないんだと。だから信が先だと。こういって見た所で、じゃ信はどうして起こるかという方法がない。それでは何かそこで待っとるより仕方がない。それは棚からボタもちということでしょう。そうではなく、やっぱりその名号の中にある。名号の中に我々は何も、というのはいえ、我々が人間に生まれてきて、生まれてから後に仏法の中にあるということでない、生まれる以前から仏法の中にあると、そういう意味です。そういうことを知るんやね。知ってみたら知る以前にあった。そういう風に名号の中にあるってことは本願の中にあるってことです。本願に遇うっていつてみてみてもですね。犬も歩けば棒にあたるっていうように遇うのじゃない。時機到来して、ちゃんと遇うようにできとるんだ。本願の方からいえば、それを待ったんや。我々のほうからいえば出遇って初めてわかるけどもね。本願の方からいえば、ちゃんと決まっとるんだ。一念一刹那もその時節を待った。一念一刹那もというその憶念が成就する。ただ奇跡的にひよっと本願に遇うんやない。本願の歴史がそこに完成する。という、我々はそれを忘れとったちゅうだけのことですわね。何かそこに矛盾するようだけど、すでに本願の中にある。名号の中にある。名号が与えられとるんだと自覚するのは後や。自覚する時に、本当に真実功德が身に満つ。自覚を待って、あるものが本当にあるものとして成就する。こんな話はこれまで。聞かれたことがないでしょう。違うかな。不思議のような話ですわね。信ずる時を待って満足する。しかし満足する円満成就の名号は初めからあったんだけど忘れとった。だから信ずる時を待って初めて、あったものがあったものとなる。seinが werden になったんやね。あったものがあるようになった。なってみると初めからあったんや。こういうようなことは矛盾する意味があるんやないかと思うんですね。何か頭の方にちょっと気にかかることがあったんだけど、何十年も気にかげながら、どうかなと思うことがあったんでしよう、僕自身に。それが今日初めてはつきりした。名号ちゅう法はいつでもある。

法はいつでもある。法に遇うのはいつでもではない。法を聞くのは皆聞くんだ。聞いて信を得る人は皆いるわけじゃない。信を得る人がいるだけだ。だから信を得る人だけが得て、後はいないかというところ、そうじゃない、やがて得るようになると。別に早く得たからといって自慢するということわけじゃない。時機到来して誰でも得るように約束されている。誓願というのは約束という意味です。そういう風に約束されとるわけです。

「我依修多羅 真實功德相」というのは何でもないことと思っちゃった。『浄土論』では何でもないんです。これはつまり、言ってみれば、真實功德を説かれた世尊のお経・經典に依って、私が『願生偈』を作るっていう意味です。『願生偈』を作るのは勝手に作るんじゃないんだ。願生浄土の莊嚴を説かれた釈迦牟尼仏の教説によって『願生偈』を作るんだという意味ですから。まあそんな意味でもないではないですが、『願生偈』を作るんじゃない。一心帰命の根拠だと。それによって一心帰命するんだと。そこに「依る」ということが非常に大事なことになるわね。これはやっぱりその信に先だって行がある。信に先だって南無阿彌陀仏がある。南無阿彌陀仏をもって信を与える。何も無いところに一心帰命つてのを与えてみようがない。それは南無阿彌陀仏なしで信を起こそうと思ってることです。善導大師に「建立自心」という言葉がありますがね。親鸞にはですね、「信巻」に「自性唯心に沈み、定散の自心に迷い」とこんなことがありますね。これがですね自心ですね。こういうことと非常に区別されとるですわね。この一心というものと定散自心と。定散自心というものはですね、悟りだと思つとるのですね。それから自性唯心は自性唯心の悟り。定散二心は心を表す。それから自性唯心は性を表す。こういう解釈なんで、対で述べてある。だけど信心も自心だし、悟りも自心だ。けれども、自性唯心に悟つたっていうけどただ自分がそう思つとるだけです。こういう風にですね。悟りだと思つとるというだけです。思つとる悟りというものは主観だ。それは観念論ですね、自分というものから脱出できん。こういうことがここにある。大事なことやわね。それでしょ。

あなた方でも僕らでも、何を我々は欲しいんかね。自己から脱出したいんだ。けれども脱出できん。これはこの定

散信心、定散信心の方は心ですけれど、我々の心というものは定散信心にすね迷つとる。若存若亡だ。信と思つたら後から崩れていく。これじゃあかんと思つてまた、信を得ると。いちいち迷っている。ただ仏教じゃ迷信という言葉は使わない。迷信という字が迷うという字と信ずる字を使って迷信とこういう。仏教ではそういう荒っぽいことは言わんですわ。迷信とは自分の心に迷つとる。人に迷わされるということはないんですわ。それでは人はえらい迷惑だ。自分の描いた人なんです。人そのものじゃない。人そのものは分らないです。自分の描いた人を描いて、それによって自分が唸らされとる。こういうんやね。それから、自性唯心の沈む方は、脱出できん。迷う方はウロウロしとるちゆうことですわね。それから沈む方はこれは動かんですわ。なかなか頑固で動かんですわ。そりゃ君の観念論じゃないかと言つても、それが観念論だということがわからんですわね、理屈じゃね。もう少し言えば、観念論だとわかっても離さん。ちようど藁でもつかむ。藁なんか一本つかんだとこでそんなものはあてにならん。それでもつかむ。離そうとしない。繩ならまだつかんでも意味があるけども、藁だと分かつとつても離せられない。そういうもんだね。分かつたら離せそうなもんだけど離さんね。つまり、藁があつたから藁を離さんのでなくて、藁がなくても離さんところもある。藁が生んだんじゃない、藁を得んとして離さん心がとる。何でもかんでも藁だろうが何だろうが、まあこれはたとえですけれど、藁だろうが棒だろうが、棒だろうが何だろうが、とにかくつかむという。離さない。そういうもんですわね。経験のある者は、何も人生は議論じゃない、経験だというようなことをいう者がおるし、学問のある者は、とにかく学問だ、頭が悪かつたら駄目だという者もいるし、何でも持つとるもので裁く。それで大きな得をしとると思つとるのが愚なんだ。得しとらへんですね。つかんだものだけ考えていて、つかめなかつたものがないに大きかつたかつちゆうことは分らん。つかむ心を捨てれば全法界が我なんだ。そういうものは手を離してみたことがないから分らんけども。失したものがよほど大きい。藁一本つかんだつたためにすね、失なつたものが非常に大きい。こういうことですわね。

ここはまあ、またお話ししますが、これはなんか夜が明けたっていうような世界を表しとる。簡単にいえばね。夜が明けた。夜が明けた世界っていうのが尽十方無碍光如来。長い間、無明の闇に覆われとった。それが一念帰命の信によって、永劫以来の闇が永劫以来の光に転じた。光が充満しとるというような意味ですわね。迷いというものの永いことに比較して、そこにたまわった世界の大きさを表しとる。ここに名号、眞実功德の名号。『浄土論』では浄土の功德という。それだからして曇鸞大師でも眞実功德は浄土の功德だと。親鸞はやっぱり名号、これは何か違ってたように思うけども同じことですね。名号とその眞実功德っていうのは如来の功德やね。如来だけあるわけじゃない、仏身仏土ですね。つまり一言でいえば浄土だ。浄土の功德と名号の功德とどう違うかというと、同じ意味ですけど、浄土の功德というものを与えるという名号なんだ。浄土の功德というものが分かった者だけに与えるんじゃない。浄土の功德というものをいかに与えるかというところに方法はない。そこに名号というものがある。功德というものを衆生に代って修行して与える。そういう修行を通して成就された功德ですから、まあそれを法蔵菩薩とか何とか神話的に言うけど、宗教心というのは人類の歴史を通じて修行したんだ。人生が修行の場所なんだ。宗教心のね。我々はただ困った困ったといっとるけどね、困ったちゅうことは人間にあるんで、宗教心に困ったちゅうことはない。受難ということはあるでしょう。深い悩みということはある。だけど困るといふことは欲ではない。困るのは欲でしょう。だからすぐね、「いやあ困ってしまった」と、何でも困る。悩みがない。人間ちゅうのは悩めないものじゃないかと思う。

それから宗教心が悩んどるんだ。それでやっぱり名号といっても浄土といってもですね、浄土の方は莊嚴というんですしね、名号の方は回向というんです。名号というものの意味は回向というのがある。五念門の行、五念門というのは広く漠然とした六波羅蜜の行というのじゃなしにですね、願生浄土の行です。とすると中心はどこにあるかということですね。善導大師の五正行ということと違うんですよ。言葉は似とるけど全然違う。観仏と称名とこう並べりゃ『観経』ですね。五正行という

のは『観経』によって立てられたものですから。先に言ったようにですね、観察門とそれから称名念仏というものをこう分けてね、「上来定散両門の益を説くといえども」というように観察が主です。しかし、本願にのぞんでみると、観察門を説かれた世尊の法というものは観察門を持つてという意味じゃない。それによって本願に目覚めよと。人間がですね、自分を据えるんですよ。その据える人間にゃね、本願に來いと言うたところで、本願に入れと言うたって、据える心を持って入ったって入らんのと同じことです。浄土に行っても地獄の心で入るとるんだから。据えるという執着というのを持っている。だからまあそこに、方便誘引という事があるでしょう。捨てるには、どういったらいいかね。努力を捨てるには、徹底的にやってみるということ。やめてしまえっていったってなかなかやめんから。徹底してやってみる。こういうようなことじゃないかと思うんですね。どこまでやったら出来ざる事かちゅうのは、途中をおかないものです。ここらまでやったらまあいいでしょうぶだろうと、そんな妥協を許さん、それが徹底という意味だ。努力を止めると言っても捨てられないのですから、努力を思い知らせるんです。努力を思い知らせるといってですね、止めよと言わずに、捨てるんです。普通ね、努力を捨てよというからわからんですよ。捨てよといって捨てるものでない。ちょうど病院で眠れんという事がある。眠れ眠れと医者が言ってますが、だけど眠れといって眠れるものなら、何も別に病院に行く苦勞はせん。だから捨てよと言われても、こりゃ捨てるわけにはいかんです。むしろそういう時にはですね、まあ一晩や二晩起きていたって死にゃせんよ、このことをはつきりしとかなあかん。こういうことがはつきりすると眠れるようになる。急がば回れと。その方がはや道だと。眠るな眠るなというところだ。よくよするなと、そんなことでまけるなと。『観無量寿経』はやっぱりその、定散二善というのが説いてあるのは、そういう努力、努力の執着というものをですね、捨てない人間を誘引して努力の必要のない世界に押しやる。努力をよう捨てることができない衆生というものを誘引して努力無用の世界を開く。なかなかたいした事業でしょう。これがつまり教育ってことなんです。まあ、『観経』にはそういうことがあるんですね。それで、『阿弥陀経』になると

『観経』の到達点から出発するんだ。『阿弥陀経』は定散二善を説いてありません。「執持名号、一心不乱」だと。そういう具合になっとりますわね。

信心はどこによっておこるかということ、聞其名号やと。聞其名号、聞という字がついとりますわね。聞という字がついとるところにですね、つまり名号というものは陀羅尼でない。御守りの札でない。聞、意味を聞けとこういうんだからね。ただ称えりゃ功德があるというふうなことで称えとるんじゃ呪文になってしまふ。よく聞けど。こういうことがあるために聞名ということがあるんだ。ちよつとそこまでにしときましようか。

(本稿は、昭和五十年二月二十日、岐阜県慈光会主催の『入出二門偈』の会における講義の筆録を整理したものである。文責編集部)